

《鄰女語》における言語的特徴について
—太田辰夫北京語七大特点説及び“～子，～兒”を中心に—
On the Linguistic Features of Chinese Novel “*Linnüyu* (鄰女語)”
From the Viewpoint of OTA Tatsuo’s Mandarin Seven Features and Suffix “- zi” “- r”

大島 吉郎
OSHIMA Yoshiro

摘要：忧患余生著《邻女语》（全12卷）刊登于《绣像小说》第六号（1903）至第二十号，是以19世纪末庚子事件为主线而描写当时社会风俗的章回小说。有关作者问题，目前主要有一个把作者拟定为连梦青的，还有一种是以刘鹗为作者的主张。本稿拟对该小说进行基本语言分析，加以指出该书持有的一些语言特点。

关键词：《邻女语》太田辰夫北京话七大特点 “-子”与“-儿” 语言特点 江淮官话

目次

- 0 はじめに
- 1 清代北京語の特徴との関係
 - 1.1 第一人称“咱们”
 - 1.2 介詞“给”
 - 1.3 助詞“来着”
 - 1.4 語気助詞“呢”
 - 1.5 副詞“别”
 - 1.6 程度副詞“很”
 - 1.7 程度補語“多了”
 - 1.8 小結
- 2 “～子”
- 3 “～兒”
- 4 おわりに

引用書目

参考文献

0 はじめに

本稿は、中国北方方言の中で共通語としての役割を担う官話方言¹⁾の下位区分の一つに当たる江淮官話²⁾を研究する上で、清末における言語資料の一つとして位置づけられる《鄰女語》についての基本的な記述を行おうとするものである。併せて清末光緒年間以前の言語状況を知る上で、本書がどのような価値を有するかについても検討を行うことにしたい。

《鄰女語》（全12回）は清末癸卯の年、光緒29年（1903）より12回にわたって上海の商務印書館が発行す

1) 中国語官話系方言の分類方法に基づく。一般的には北京官話、西北官話、西南官話、江淮（下江）官話の如く分類される。
2) 江蘇省南京を中心とする長江下流域、及び淮河流域に話される北方官話の一支流。名称の由来、分布の範囲については、石紹浪2016: pp.1-6参照。かつては“下江官話”と称されたが現在はこの名称が用いられる。

る《繡像小説》³⁾に連載された章回小説である⁴⁾。《繡像小説》は《鄰女語》巻五を掲載した第十號までは刊行年が示されているが、巻六が掲載された第十三號に刊行年の記載は見られず、同作品は未完ではあるものの、最終巻十二がいつ刊行されたのか、確かな年月を知るための記述はない⁵⁾。作者は憂患余生とされるが、もちろん実名のはずはなく、それが誰であるかについては二説見られる。《老残遊記》の作者である劉鶚とするもの⁶⁾、《商界第一偉人》の作者である連夢青とするもの⁷⁾があるものの、言語面からの検討、検証は行われていない。

繡像小説第六號	癸卯六月十五日	巻一
第七號	癸卯七月初一日	巻二
第八號	癸卯七月十五日	巻三
第九號	癸卯八月初一日	巻四
第十號	癸卯八月十五日	巻五
第十三號		巻六
第十五號		巻七
第十六號		巻八
第十七號		巻九
第十八號		巻十
第十九號		巻十一
第二十號		巻十二

本書が言語資料として取り上げられることは極めて少なく、中国では“給”の被動用法について触れた江藍生1989、日本では香坂順一1962⁸⁾、1963が数少ない先行研究として挙げられるのみである。

江淮官話の實際を研究する上で、《鄰女語》の言語的特徴を明らかにすることは、同作品における作者の言語観の一端も明らかになることが期待され、作者は劉鶚、あるいは連夢青のいずれであるかについての結論も自ずと導き出されるものと考えられる。本稿は、太田辰夫1969が示す清代北京語の七大特点を基準に、同書の言語的特徴を明らかにするとともに、名詞接尾辞“-子”及び“-兒”についての初歩的検討を行うものである。

テキストには1957年上海文化出版社刊《鄰女語》を用いる⁹⁾。

1 清代北京語の特徴との関係

1.1 第一人称“咱们”

“咱们”は全36例見られるが、“我们”が表す排除の意味と区別して包括型の意味で用いる例は見られない。例えば、

3) 1980年に上海書店より全8冊(合訂本)として影印復刻されている。

4) 樽本照雄1993によれば、実際に刊行された時期を忠実に記載しているかについては疑いがあるという。上海文化出版社1997年刊《鄰女語》によると、文字数は“出版者的話”等も含め62,000字。

5) 各號刊行の間隔から考えると、巻十二が掲載された第二十號が出版されたのは1904年以降であると考えられる。

6) 陆楠楠2014参照。

7) 森川登美江1998参照。樽本照雄1993は劉鶚説を明確に否定する。黄立振1982も作者は連夢青とするが、連夢青については「詳しい経歴はほとんど知られていない」という(森川登美江1998)。

8) 下江官話の語彙的特徴を抽出するための資料として、《六月霜》、《負曝閑談》、《鄰女語》、《苦社會》、《官場維新記》の清末五作品を上げている。

9) 樽本照雄1977は《繡像小説》と上海文化出版社本との異同について多くの問題点を上げるが、言語資料としての信頼性を損なうものではないと考えるが、版本間の具体的異同については別途考察する必要があるであろう。孫楷第1982: pp.87-88参照。黄立振1982: pp.590-591は1913年に商務印書館より単行本が出版されていることを指摘する。

“你们使劲，快点儿赶到码头，赏你们酒钱！要不然，咱们明儿到了镇江，误了咱们的路程，送你到衙门，敲断你的狗腿！”（隣女語1）

又涎皮涎脸的，对着自家伙里说道：“他们南边的老爷们，不欢喜听咱们的北调，咱们姐儿们就来唱一个南边曲子罢。”（隣女語5）

“咱家”の用例も4例見られるが包括型ではない。例えば、

好不容易又等到那传帖管家走了进来，说道：“咱家主人因在钦差大人那边侍候久了，发了烟瘾，又触起旧病。（隣女語6）

怎的这时候倒反要咱们的性命，拿咱家去抵数！（隣女語9）

1.2 介詞“给”

“给”が受益者を導く介詞用法はわずかに以下の3例が見られるのみである。例えば、

要是给你的老鸨知道了，你可又要吃亏了。”（隣女語5）

看见这个苏州抚台当过的差使，如今给他武官当了，便把他兴头的了不得。（隣女語7）

他到黄连圣母家，学会了红灯照，就给他三人每人买了一部包车，到处替人看香头。（隣女語11）

《隣女語》において「受益者」を示す介詞としては“替”が10例用いられており，“给”に対して明らかに優勢である。例えば、

还替他写信到京里皇帝跟前，多说好话，格外重用。（隣女語4）

那个炮队里营官，侦探的哨官，亦替他说了许多好话，随折保奏两人一个副将衔，一个遇缺即补的游击。

（隣女語7）

受益者が動詞の主語でもある兼語型式を取る例は1例見られる。

你却要看我薄面，要是遇着我的朋友，也要抬抬手儿，留碗饭给他们吃吧。（隣女語3）

伝達の対象を示す例も見られるが、<V+賓語+“给”+対象>の語順であり、南方方言あるいは古漢語の語順に沿ったものであり、北方語の用法ではない。例えば、

却早有人报信给董二姑，刘三姑两个。（隣女語11）

〔V给〕

“分给，交给，赔给，送给”などの8例が見られる。例えば、

一霎时间，都一个个牵进槽来，分给银两而去。（隣女語3）

诸公到此，要交给我四万银子兑换六万串制钱。（隣女語4）

这会子一一都送给他，他若是再来要，却是难以为继了。”（隣女語8）

而且比别省办得更好，赔他银子，仍是用在中国人身上，不是赔给外国人手里。（隣女語9）

〔把=给〕

“把”を“给”の意味として用いるのは江淮官話の特徴であり¹⁰⁾、7例見られる。単独で用いる場合には「受け身」として被害をもたらす対象を導く。例えば、

岸上就是洋人地界，小心把洋鬼子洋枪打死。”（隣女語1）

要是把别人家听得，又不知甚么大事。（隣女語3）

我的马，今天早上把山东贩子卖把他们营里了。（隣女語3）

“V把”として“交把，卖把，送把”のように複合動詞化する例も見られる。例えば、

我却不肯送把乱民抢夺。（隣女語1）

金融听到这里，忙笑道：“主人主人，要是做好事，主人将这私卖去一半，交把上海善堂善会里就是了，又何必自家去哩。”（隣女語1）

好好的一桩生意，要送把别人，你敢是昏了？”（隣女語2）

10) 尾崎2003: pp.360, また大島1996: pp.14参照。廖大国2013: pp.72参照。

我的马，今天早上把山东贩子卖把他们营里了。(隣女語3)

1.3 助詞“来着”

近過去の回想を示す助詞“来着”は用いられていない。

1.4 語気助詞“呢”

語気助詞“呢”は平叙文を“呢1”，疑問文・反語文を“呢2”，省略疑問文を“呢3”として整理することにする。

〔呢1〕22例

前生不知造了甚么大罪过，还要再遭此劫呢！（隣女語2）

那里晓得后来比我们这时候还不如呢！（隣女語2）

〔呢2〕8例

如何便是这样没志气，要想回去呢？（隣女語2）

这有权有势的亲戚，又怎么不要得电报局，招商局的差使呢！（隣女語3）

〔呢3〕1例

我的酒钱呢？”（隣女語2）

“哩”も並行して用いられており，平叙文，疑問文それぞれの例が見られる。南方方言の要素が融合している状況にあると言える。

那里知道他是说：“天已亮了，他们客人今早上路程，我们还只顾说话哩！（隣女語3）

不磨一听，便猜知端的，也不理论，便告知那店婆子道：“我就是往北京城里去放呢的，还有大队银钱行李在后面哩。（隣女語4）

你的老爷在那里催你上路哩。”（隣女語6）

到了这步田地，还是这样无理取闹，倚势凌人；要是太平的时候，不知怎样鱼肉小民哩！（隣女語1）

何必自家去哩。”（隣女語1）

1.5 副詞“别”

禁止を表す副詞“别”は用いられていない¹¹⁾。

1.6 程度副詞“很”

4例用いられているのみで，用例数から見ると必ずしも北方語の要素を色濃く反映しているとは言えない¹²⁾。

你看这两个肥猪很壮的。（隣女語2）

一时溃勇逃兵，络绎喘息而至，一个个面无人色，像是很辛苦的一样。（隣女語7）

听了沈道台一番言词，心里很是抱歉，连说：“有理，有理！（隣女語8）

赵大人很愿意做个饱鬼，不上一刻工夫，吃得酩酊大醉。（隣女語9）

<形+得很>は2例見られ，<形+得慌>も2例見られる¹³⁾。

风景也好，也繁华得很。（隣女語3）

因为北京城里洋人造反，这里查奸细查得紧得很呢。（隣女語4）

想是主人闷得慌。（隣女語1）

11) “不要”によって禁止の意を表す。

12) 《老残游记》に見られる程度副詞“怪”は本書では用いられていない。

13) 《官話類編》1892年版（1898年再版）による尾崎實2003: pp.358は<~得慌—~得够>，同書1906年改訂（1909年再版）による大島吉郎1996: pp.9では<~得慌—~得很>に記述が変更されている。

那街上游勇逃兵，更比清江浦乱得慌。(隣女語3)

1.7 形容詞+ “多了”

「ずっと、はるかに」の意味を表す<形+多了>が比較文の中で2例用いられている点は注目に値する。

那大汉愈觉惊惶，色颇不豫，又说道：“倒看你不出，这个小蛮子，倒比他当兵的做将官的强多了。(隣女語3)

不磨在马上叹息一回，不想今日草泽中尚有一二英雄，性情抗爽，倒比咬文嚼字的好多了。(隣女語4)

<还要+形>は2例見られ、いずれも比較文を形成している。

你要是带了手枪，遇着强盗看见了，他设了害你的陷阱，比寻常还要凶。(隣女語4)

放赈的老爷倒比闹饥荒还要凶。(隣女語4)

1.8 小結

本稿の調査結果について、同じく太田説を基準に《老残游記》に対する記述を行った山田忠司2011との対比を行うと、以下の表のようにまとめることが出来る。《隣女語》は清代北京語の幾つかの要素を含みつつも、南方方言¹⁴⁾の色彩を帯びており、地理的条件からも、両者の要素が重なり合っているとの判断が出来るのである。

5例以上用例の確認出来るものは○、5例以下は△、用例の無い項目には×の記号で示すことにする。

	太田説	《老残游記》(山田2011)	《隣女語》
1	第一人称表示包括對方的“咱们”	咱们 ₁ ×	咱们 ₁ × 咱们 ₂ ○ 咱家 ○
2	介詞“给”	1) 受益者 ○ 2) 被害者 × 3) V給 ○ 4) 被動 ○ 5) “把”=“給” ×	1) 受益者 △ 2) 被害者 × 3) V給 ○ 4) 被動 △ 5) “把”=“給” ○
3	助詞“来着”	×	×
4	語氣助詞“呢”	1) “呢” ○ 2) “哩” ○	1) “呢” 呢 ₁ ○ 呢 ₂ ○ 呢 ₃ △ 2) “哩” △
5	表示禁止的“别”	“别” ○	“别” ×
6	程度副詞“很”	“很” ○ “怪” ○	“很” △ “怪” ×
7	形容詞+ “多了”	“~多了” × 比…还要… ○ ¹⁵⁾	“~多了” △ 比…还要… △

14) 主に吳方言地区における通用語としての官話を指す。

15) 山田忠司2011では触れられていないが、鈴木直治1963が指摘するように、清末資料における重要な指標であると考えられるため、追記することとする。

2 “～子”

《鄰女語》に現れる名詞で、軽声に読まれる“～子”を接辞するのは65語である¹⁶⁾。例えば、

胆子 彈子 頂子 兒子 二毛子 法子 販子 房子 瘋子 杆子 羔子 褂子 鬼子 櫃子 孩子
会子 夾子 叫化子 轿子 窩子 金子 鋸子 老妈子 老头子 老子 林子 矛子 帽子 妹子 面
子 腦子 捻子 女子 牌子 片子 婆子 鋪子 妻子 旗子 曲子 圈子 日子 嗓子 身子 繩子
书呆子 探子 条子 亭子 围子 屋子 弦子 箱子 小伙子 小子 性子 眼眶子 燕子 样子 窩
子 银子 影子 折子 种子 桌子

これらのうち《現代漢語辭典（第7版）》（以下《現漢》と略称）に収録されない語には以下のものがある。

二毛子 羔子 窩子 林子 矛子

《現漢》に〈方〉の注記があるのは“妹子”，“窩子”の2語である。“妹子”は《漢語方言詞匯（第二版）》：pp.300では西安，蘇州，南昌での使用が認められる。

3 “～儿”

《鄰女語》に現れる名詞で，“～儿”を接辞するのは33語である。例えば、

鴉儿 胆儿 道儿 点儿 调儿 顶儿 堆儿 法儿 份儿 缝儿 官儿 哈巴狗儿 孩儿 会儿 姐儿
籃儿 老儿 老头儿 翎儿 名儿 明儿 鋪盖卷儿 人儿 事儿 手儿 团儿 玩意儿 媳妇儿 些儿
姓儿 鴉片烟儿 样儿 爷儿

これらのうち《現漢》に収録されない語には以下の6語がある。

官儿 老儿 人儿 些儿 姓儿 鴉片烟儿

“明儿”は「明日」の意味で用いられているが、明らかに北京語を意識した用例であることは“打着京片子”（都ことばを気取って）の説明から明らかである¹⁷⁾。例えば、

有个人在船头上，挺着腰杆子，打着京片子，乱嚷乱说道：“你们使劲，快点儿赶到码头，赏你们酒钱！要不然，咱们明儿到了镇江，误了咱们的路程，送你到衙门，敲断你的狗腿！”（隣女語1）

名詞接辞“～儿”は江淮官話に決して珍しいわけではないが、北京など北方に比べるとやはり制約があると言わざるを得ない¹⁸⁾。

4 終わりに

《鄰女語》が連載された《繡像小説》は上海で刊行された識字層向けの雑誌であり、かならずしも非識字層である大衆を購買層とはしていないことを確認しておかねばならない。一方、江南から南京、北京に至る交通、運輸の経路は言語（口語に限らない）の交流を促し、南北さまざまな言語が融合しながら近代共通語を形成してきた経緯もあり、方言区分においては明確な線引きが困難であることは自明である。きわめて平易な言語現象から見えてくる《鄰女語》（江淮官話）の言語的現実、南北各方言の緩衝地帯としての役割である。江淮官話の記述に当たっては、北方方言の南方への伝播と並行して、南方方言を中継する機能も果

16) “刽子手”は含めない。

17) “京片子”は“京腔”，“京话”などとも称され、本書には他にも1例見られる（“那打京片子的不听犹可，一听便雄赳赳气昂昂的，伸出手打那答话的两个耳巴，口里大骂道：“你这王八羔子，小杂种！”（隣女語1）”）。本書に“明天”は見られるが1例のみ（“明天送钦差大人，还不知道能够不能够。（隣女語6）”）。

18) 音韻の変化についての記述は《南京方言志》：pp.207“第二十八节 儿化举例”を参照。“豆芽儿，茶杯儿，明儿个儿，皮儿”等全64語を挙げる。

たしていたことを踏まえた分析が求められるとすることが出来よう。

引用書目

《邻女語》 忧患余生著 上海文化出版社 1957年

《现代汉语词典（第7版）》中国社会科学院语言研究所词典编辑室 商务印书馆 2016年

《汉语方言词汇（第二版）》北京大学中国语言文学系语言学教研室 语文出版社 1995年

参考文献

飯塚朗・中野美代子訳 1979 阿英著『晚清小説史』，平凡社。

大島吉郎 1996 「《官話類編》方言詞索引」，近代漢語研究会『近代漢語研究資料・索引四種一『大唐三蔵取經詩話』『宣和遺事』『紅樓夢（第一回）』『官話類編』一』（pp.1-52）。

太田辰夫 1964 「北京語の文法特点」，『久重福三郎先生坂本一郎先生還曆記念中國研究』1964（『中国語文論集語学篇元雜劇篇』汲古書院 1995，p.243-265）所収。

——— 1969 「近代漢語」，『中国語学新辞典』光生館。

尾崎 實 2003 「《官話類編》所収方言詞対照表」，『尾崎實中国語学論集』好文出版 2007 所収（pp.351-388）。

香坂順一 1962 「下江官話の性格（一）——語彙の面から見た」，清末文学言語研究会『清末文学言語研究会会報』第2号（p.60-80）。

——— 1963 「清末の単音動詞——その認定の試み」，清末文学言語研究会『清末文学言語研究会会報』第3号（pp.47-89）。

鈴木直治 1963 「比較文に用いられる「還要」について」，『清末文学言語研究会会報』第3号（p.25-38）。

樽本照雄 1977 「版本のこと——「鄰女語」を例として」，樽本照雄『清末小説論集』法律文化社 1992 所収（pp.355-363）。

——— 1992 「『老殘遊記』の成立」，樽本照雄『清末小説探索』法律文化社 1998 所収（pp.89-120）。

——— 1993 「『繡像小説』の刊行時期ふたたび」，樽本照雄『清末小説探索』法律文化社 1998 所収（pp.226-239）。

宮田一郎 1978 「『二十年目睹之怪現狀』語彙索引」，明清文学研究会。

森川登美江 1998 「憂患余生と『隣女語』」，『大分大学経済論集』第49巻第5・6合併号（pp.83-97）。

山田忠司 2011 「關於《老殘遊記》語言特徵的報告」，遠藤光暁・朴在淵・竹越美奈子編『清代民国漢語研究』，韓國學古房（pp.169-175）。

黄立振 1982 《八百种古典文学著作介绍》，中州书画社。

江蓝生 1989 “被动关系词‘吃’的来源初探”，《中国语文》第5期（pp.370-377）。

刘丹青 1995 《南京方言词典》，江苏教育出版社。

陆楠楠 2014 “刘鹗应为《邻女語》作者考论”，《中国现代文学研究丛刊》第3期（pp.42-53）。

廖大国 2013 《文学作品中的江淮方言词语例释》苏州大学出版社。

南京市地方志编纂委员会 1993 《南京方言志》，南京出版社。

石绍浪 2016 《江淮官话入声研究》，北京语言大学出版社。

孙楷第 1982 《中国通俗小说书目》，人民文学出版社。